

<巻頭言>

「激動の時代」の大学教育を考える

吉武 博通

(東京家政学院大学理事長)

いつの時代においても社会は変化し、その変化が人々に期待をもたらしたり、その逆に人々を不安に陥れたりしてきたのだろうが、いま起きている変化はこれまでとは比較にならない規模でかつ加速度的に進行している。地球規模の環境問題、不安定化する国際情勢、国内で急速に進む少子高齢化、生成 AI に象徴されるデジタル技術のインパクトなど、世界も日本もまさに「激動の時代」にあるといえる。

いまを生きる若者たちの目に未来はどう映っているのか。先のことよりも目の前の YouTube 動画の方に関心が向いているのかもしれないが、彼ら彼女らが未来の社会に目を向けた時、期待よりも不安の方が遥かに大きいのではないだろうか。

このような時代において大学教育に携わる私たちがなによりも重視すべきは「学生と共に考える」姿勢ではないかと考える。人類社会の問題、日本社会の問題だけでなく、より身近な職場や生活に関する問題まで、解決の難度は上がり、答えが自明でない領域が広がっている。学生と共に考えるためには、教員もこれまで以上に社会の動きに目を向け、自らの専門だけでなく近接領域を含めて広く学問の動向に関心を持ち続ける必要がある。職員も同様である。自大学という限られた世界や部署から視野を大きく広げる必要がある。

人材育成を考える際の「能力」については、「知識」「スキル」「態度」の3要素を挙げることが一般的である。東京家政学院の創立者である大江スミも「知識」「徳性」「技術」の3つを掲げ、それを建学の精神として本学院も100年の歴史を刻んできた。どちらにも共通する言葉は「知識」である。他方で、近年の日本社会においては「知識」よりも「スキル」や「態度」を重視する傾向が強まりつつあるように思われる。産業界が求める人材要件でもコミュニケーション能力、問題解決能力、チームワークなどの要素が上位に並ぶ。

答えが自明でない領域が広がる時代において、知識よりもスキルや態度が重視されるのは理解できなくもないが、果たしてそれで良いのだろうか。私たちは「知識」の意味を問い直し、知識がスキルや態度とどのような関わり合いを有しているのかなど、検討してみる必要があるのではないかと考える。

そもそも「知識とは何か」は哲学の世界において長く問われ続けてきたテーマであり、容易に答えの出せるものではないが、確かなことは「知ること」によって初めて「知らないこと」との間の区別ができるということである。それによって「知らないこと」を「知りたい」と思う気持ちが湧きあがる。また、自分の知識が如何に限られたものであるかを理解することもできる。そして自身の限界を知ることが謙虚さや誠実さにつながるのではないだろうか。その逆に人より多くの知識を有しているとの過信が傲慢さにつながることもある。

大学教育において考えるべきは、「知ること」に対する最初のきっかけをどのような形で学生に与えれば良いかということと、「知らないこと」を知ろうとする好循環をどう後押しすれば良いかということである。

大学4年間で私たちが学生のためにできることは限られている。その中で、興味・関心の幅を広げること、多面的・論理的に物事を考えることの2つについては、しっかりと身につけて社会に巣立ってほ

しいと願っている。

2023年に創立100周年を迎えた東京家政学院はいま、18歳人口減少と家政系志願者急減という逆風を受けているが、激動の時代における新たな大学教育の姿を示して実践することで、確かな歩みにより新たな歴史を刻むことができると確信している。